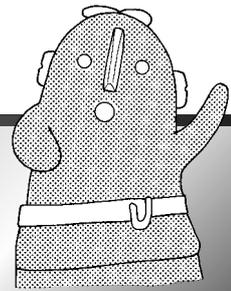


野原元境内遺跡

～文殊寺と京焼写し～



はじめに

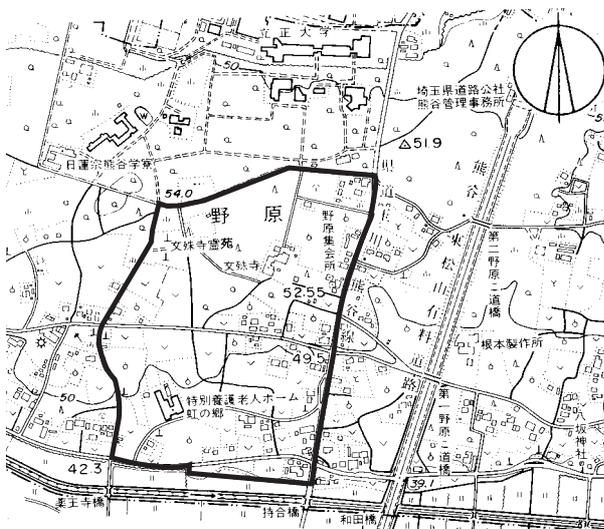
元境内遺跡は、江南台地の東南端、和田川に面する標高50m前後の平坦地に所在する、文殊寺を中心とする遺跡です（第1図）。

現在の文殊寺は、『新編武蔵風土記稿』によれば、1483年に増田四郎重富が、自分の居住していた館に、七堂伽藍を建立し、境内地1万5千坪を寄進した事により始まったとされ、開基より35世を数えています。

遺跡の概要

現在でもその館跡の痕跡として、境内の西・北側に外郭の土塁と堀が、西側で230m・北側で320mが残っており、内郭の堀も西側で110m程確認することができます（第2図）。

1984年に、県立歴史資料館が部分的な発掘調査を行っており、中世の銭貨・板碑破片・陶器片（常滑焼）が出土しており、本館跡が中世のもの



第1図 遺跡の位置（1/20,000）



第2図 増田館跡測量図

のであることを裏付けています。

また、1996年には、町教育委員会によって本堂裏の約1,500㎡の発掘調査が行われており、中世の館跡に関連する遺物から、近世の文殊寺に関する遺物、そして昭和初期の電球・ピン・陶磁器類に至るまでの多量の遺物が出土しています。

文殊寺の伝承によると、文政11年（1828）に火災が発生し、本堂その他12棟を焼失したとされています。今回の町教育委員会の発掘調査では、天明3年（1783）に噴火した浅間山の火山灰層の上より、火災によるものと推定される焼土層および、片付けられた多量の炭化材・瓦・釘・仏具・陶磁器類が検出され、この火災を裏付けるものとなりました。

遺物の中でも、近世肥前（伊万里）・瀬戸美濃産陶磁器類の出土は県内でも類を見ない程充実しており、今回は、全国的にみても珍しい、肥

前産陶器の『京焼写し』について紹介してみたいと思います。

『京焼写し』について

肥前産陶磁器と呼ばれているものは、大きく「陶器」と「磁器」に分けられています。従来、陶器は『唐津焼』、磁器は『伊万里焼』と呼ばれ、それぞれ積み出し港にちなんで、消費地で付けられた名称と推測されています。

唐津焼は、1580年代頃に朝鮮から移住した陶工により始められたと考えられており、伊万里焼はやや遅れて17世紀に入り、豊臣秀吉が朝鮮出兵の際に、鍋島軍によって連れ帰られた朝鮮の陶工が磁器の焼成に成功した事に始まるとされています。そして、17世紀も後半になると、著しい技術革新を遂げ、今まで中国からの輸入に頼っていた磁器に変わって国内市場を席卷し、オランダ東インド会社を通じ西欧にも輸出されるまでに発展しました。

この時期、伊万里の磁器の窯で焼かれた特徴的な陶器(碗)があります。素地は緻密で、卵黄色気味の釉が掛かり、内面には呉須(藍色顔料)で楼閣山水文様が描かれています。高台下には「清水」「木下弥」「新」等の印が押されています。これらの特徴は、それまでの肥前産陶磁器の製作体系の中には見られない異質なもので、

『京焼』に類似することから、『京焼写し』と呼ばれています。

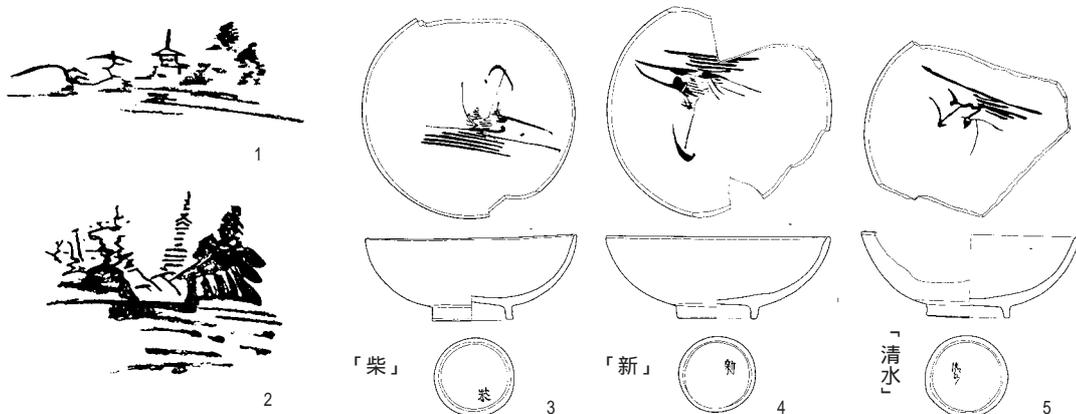
『京焼』とは、現在でもその詳しい窯業形態は不明ですが、「仁清」「乾山」等の陶工作品に代表される、素地が緻密で、卵黄色気味の釉が掛かり、色絵を施した近世の最高級陶器でした。

つまり、当時すでに名声を博していた『京焼』というブランド名を念頭にして、大量生産によるコピー商品の流通販売を、伊万里の陶工およびその管理者がねらったものと推測されます。コピー商品といえども、現在のところ、その出土例は決して多くなく、江戸の大名屋敷クラスで数点～30点位、県内では僅かに2～3点が出土しているにすぎません。

今回の発掘調査では、35点以上の『京焼写し』が出土しており、当時の文殊寺の財政がかなり豊かであったことがうかがえます。

ちなみに、第3図1・2が『京焼』の楼閣山水文で、3・4・5が本遺跡から出土した。『京焼写し』のもので、コピーだけあって文様が簡略化されているのがわかります。やはり、オリジナルは越えられなかったという事でしょうか。高台下の「清水」は京都の清水を、「柴」「新」は、陶工の名前を現しているものと推定されています。

< 江南町教育委員会 >



第3図 楼閣山水文